

震災支援で学んだこと

◆今回の震災支援の概要

宮城県より、東北地方太平洋沖地震おける社会福祉施設等に対する介護職員派遣要請にて、神奈川県介護職員派遣による、第2派遣隊

《派遣期間》

2011年5月4日（水）～9日（月）

《派遣人数》

山形県：2名 神奈川県：5名 計7名

※他派遣やボランティアは医師や看護が主で20名ほど

《派遣場所》

宮城県 気仙沼市総合体育館 「ケーウェーブ」

《避難者数》

約600名 内要介護者 18名

メインアリーナ・サブアリーナ・武道館の3つに分かれている。家族ごとに人の腰の高さほどのパーテーションや、段ボールにて仕切られている。

《ライフライン》

電気・ガス・水道とも復旧済みだが、トイレはペーパーを流すことは不可。ごみ袋にペーパーをためておく。避難者数が多く、また節水のため入浴は週1回のみのため、元気な方は近くの銭湯に行かれている方が多い。

《業務内容》

山形県から派遣された職員と避難所における要介護・要支援者（18名）の方の身体介護・トイレ介助・入浴介助（シャワー浴）・食事介助・配膳・食器洗い・服薬介助・足浴・洗濯・布団干し・掃除・声かけ・メンタルケア・傾聴・付き添い家族の方のメンタルケア・体育館のドアの開閉などの支援を行う

●シフト（勤務時間）

第2班は、1名はリーダー業務のためフリーとし、他6名を2名ずつの3つに分け、日中4時間・夜勤4時間の計8時間勤務とした。食事時は、勤務外でフォローに入ることとする。

1班： 8時～12時 ・ 20時～0時 （昼食のフォローに入る）

2班： 12時～16時 ・ 0時～4時 （夕食のフォローに入る）

3班： 16時～20時 ・ 4時～8時

●移乗・移動介助者・・・18名中8名

●食事・・・・・・・・・・朝食：パンと飲み物、昼食：自衛隊による炊き出し、
おやつ：なし、 夕食：すかいらーくのレトルト食品

●配膳介助者数・・・・・・ご家族不在時により増えるが、平均11名

- 足浴者・・・・・・・・・・9時30分～11時・15時30分～16時30分
 (毎日自衛隊よりお湯配給が9時～12時30分・15時～18時にある)
 白癬がある方。5名から6名入浴日以外実施
- 入浴日・・・・・・・・・・週1回：土曜日 10時～12時
- 洗濯・・・・・・・・・・週2回：火曜日・土曜日 10時～16時

《1日の流れ》

- 6時 起床介助
- 7時 新聞配布
朝食配布・服薬介助
- 8時 薬受け取り
- 9時 リーダーミーティング
- 9時30分 医療カンファレンス
- 10時 ラジオ体操
足浴
※土曜日は入浴(10時～12時)
※火・土曜日は洗濯(10時～16時)
掃除
布団干し
- 11時30分 炊き出し配膳
配薬
- 12時30分 食器洗い
レクリエーション・慰問
- 15時 医療カンファレンス
足浴
- 16時30分 配膳
朝食の受け取りと保管
配薬
食器洗い
就寝介助
- 20時30分 就寝準備
- 21時 消灯
巡視・トイレ介助

※随時ドアの開閉・傾聴や、居場所確認・トイレ介助・活動記録の記入の実施

◆震災支援の体験から学んだこと

- ・誰のための？何のためなのか？と 自問自答を繰り返し、本当に避難者の方のためなのか考え続けながら行う事の大切さ。
- ・施設職員などありがちだが、つい手出しをしすぎてしまったり、集団生活として一人ひとりの避難者の方をとらえがちだが、避難所であっても在宅支援としてとらえ、仮設住宅や今後の生活で自立した生活が出来るように、支援者が手出しをしすぎず、一人ひとりの生活リハや家事が行えるように、今一緒に行くこと、見守ること、など何かをすることだけが支援ではなく、必要な時にフォローに入るなど様々な支援方法があり、全ては自立支援に繋げなければならないと感じた。
- ・このくらいの麻痺なら・・・とか、このレベルの認知症がある方ならばなど、援助方法を決めてしまうのではなく、その方が持つ力をどのようにしたら発揮できるか、固定概念を持たずに接し、柔軟な対応に繋げていく必要がある。
- ・様々な体験をされた方々が、避難所という限られたスペースで過ごす中のストレスや、今後の生活の不安など悩みを抱えている。その中で、介護職の私たちは五感を使いながら、その方の表情や雰囲気・周りの環境等を見ながら、介護職だからできる傾聴があると改めて感じた。避難所に入らせていただいたのは、たった約5日間であったが、災害のショックや動いていなかったことから歩けなくなっていた方へ、様々なアプローチをしたことで、100メートルほど歩けるようになられ、ご本人が一番歩けるようになったことを喜んでおられたり、「あなたと出会えてよかった」とおっしゃられながら、色々な想いを泣きながら話してくださった方もいらっしゃり、今後も、コミュニケーション能力を高めていきたいと感じた。
- ・様々なボランティアや派遣期間がある中で、正確な情報伝達を行うことの大切さを改めて感じた。情報を集約しているのは保健師の方であったが、看護師・保健師共に情報を伝えたり、介護職として知っておくべき点の情報ももらいに行ったりと、職場で行っていたことが活用でき、情報共有に生かすことができた。伝えたから、相手はわかっただろうではなく、確認し合うことや相手がわかりやすく伝えるには？と考えながら情報提供するという事など、職場で行っていた実践や研修は、職場以外でもきちんと生かしていけることが分かった。
- ・震災後すぐに派遣された介護スタッフの方々が、少しでも避難所生活をよりよくするため、また、支え続けられるようにと、要介護者の方のADL表作成や、食器を購入したりレク用品購入や、1日おきに掃除をしましょう・・・など次に来る派遣職員にも繋がるようにしてしてくれたことがあった。私たちのチームでは、以前誤薬があったと聞いたため、配薬チェック表を作成した。また、入浴が週1回のため、カテーテル使用者や尿臭がする方にトイレ時1日1回陰洗を行わせていただいたり、要介護者の方一人ひとりのケアに関わる留意点等の改定版作成や、1日の大まかな流れのマニュアルを作成し、空いている時間をわかりやすくし、有効活用できるようにした。派遣職員は変わっていくが被災者の方のために・・・私たちが行えること、行うべきことは何か？と皆が考えており、そしてそれはきちんと繋がっているのだなぁと感じた。
- ・心のケアとして、ドクターが定期的に診察を行ってくださっており、迅速な対応を行うことにより、災害鬱の悪化防止に繋がるのではと思った。

- ・物資を避難所に直接送ってしまうと、仕分けが行えず山積みになってしまい、必要なものが探せずじまいになることがあることがわかった。
- ・ボランティアが被災地に多く来てくれていることは良いことだが、ボランティアが多いため現地の方が仕事を更新してもらえなかったとの噂を聞いた。ボランティアは行う事を見極めながら行わないと、現地の方の仕事を奪う事になりかねない事を肝に銘じておかねばならない。
- ・今回の神奈川県庁からの派遣要請時、県庁の方自体が避難所などの把握が行えておらず、質問しても解答に困られていたことが多くあったようだ。実際現地まで付き添ってくださった方も、さほど現地の情報収集など行わずに、見学もすぐ終わり帰られる姿があった。指揮をとる方？がきちんと現場で何が起きているのか、何に困っているのか自分の目で見られることを、情報収集と共に行うべきではないかと感じた。
また、6日間ごとチームメンバー全てがチェンジする事について、リスクが高い点は県庁の方へ、検討していただきたいことを依頼した。ボランティアの受け入れ態勢も、互いに無理がないようにするべきである。

◆これから私たちがすべきこと

- ・今回の大震災を体験し、具体的行動を示した（震災時）防災マニュアルを完成させておくべきだったと、後悔しています。

自然災害などは、いつ起こりうるか、誰がその時施設にいるかなどわかりません。いつ起きてしまっても、土台となるマニュアルに従い動くことで、多くの命が救えるように。また、被害を最小限で食い止めなければなりません。

- ・自助→ 共助→ 公助 の優先順位を心構えとして持つておく

【施設での準備と備え】

- ・防災マニュアルの作成

準備しておくことや、決めておかななくてはいけないこと、手順や他の協力機関との連携方法等など、事細かな点など「高齢者の入所施設における防災マニュアル」などを参考に、法人の基本バージョン・各施設のマニュアルを作成すべきである

- ・立地環境と災害予測

例) リハリゾートわかたけでは、がけ崩れや施設前の橋が壊れないか。構造や強度、壊れた場合はどうするか？

- ・防災連絡網作成

職員・ご家族・業者・協力病院 等

災害用伝言ダイヤル・メールの活用

徒歩で来れる職員等わかりやすくしておき、どのような場合に招集されるか明確にする

- ・ご利用者様の個人台帳の情報は、常に最新のものにしておく

- ・自家発電の使用方法の確認と、どのくらい使えるのか把握できるようにする

- ・備蓄

食事・水・パッド・布団類・医薬品・血圧計・体温計・ラジオ・携帯カイロ・担架・ビニールシート・タオル
使い捨て食器・使い捨てスプーン・フォーク・ウェットティッシュ・懐中電灯・ランタン・電池・笛・
ヘルメット・ビニール袋・ラップ・工具・テープ・Pトイレ・手袋・油性ペン など

- ・水が出ないときは手洗い場用に、ポリタンクやアウトドア用の水入れを活用

- ・耐震診断や補強工事やガラス・電球等が散らばることを防ぐフィルムなどの工夫や倒れやすいものは固定する

- ・役割分担

各部署のリーダーがどうにかするだろう・・ではなく、各役割分担を明確にし、リーダー・サブを決めておく。
全体のコーディネーター役がしっかりしていないと、まとまりがつかず大混乱を招く可能性がある。

- ・日々必要とされる事を見極め、対応していくためにも、情報の共有をきちんと行う

- ・災害後落ち着いたら、地域は、地域の方が中心になり動ける環境づくりをし、職員はサポート役となるように努める

- ・地域の方と、防災訓練をきちんと定期的に実施し、互いに協力体制を築いておく

【スタッフが出来るようにしておく点】

自然災害等、いつ何が起きるかわからないため、当事者意識を持ち、自らが自立して行動できるように
職員一人ひとりが、災害や緊急時の手順・対応方法、備品の保管場所・取扱い方法を把握し、時にはマニュアル
通りではなく臨機応変に動けるようにいくつかのシミュレーションを学んでおく。

終わりに、

このたびは、貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

今後も、私たちが行えることは何かと考え、出来るボランティアや節約等、やり続けていきたいと思えます。

2011, 5, 16 海野洋子